

平成29年1月15日

No.326

畜産会 経営情報

主な記事

- ① おらが故郷の経営自慢
肉用牛の発育・生理を考慮した施設整備・飼養管理技術が高収益性を実現
—幅広い情報収集・共有化と細やかな心配りで家族の夢を叶える—
株式会社 玉牧場（肉用牛繁殖経営・鹿児島県霧島市） 内倉 亘
- ② 行政の窓
「平成27年度牛乳・肉用牛・肥豚生産費」を公表 農林水産省大臣官房統計部
- ③ セミナー経営技術
平成27年度における畜産特別資金等借入者の計画達成に係る実績点検結果の概要について②（養豚経営）
- ④ 農林水産省からのお知らせ
薬剤耐性（AMR）対策の推進について
- ⑤ （独）農畜産業振興機構からのお知らせ
肉用牛肥育経営安定特別対策事業（新マルキン事業）の補填金単価（概算払）について
- ⑥ あいであ&アイデア
誤って踏んでも壊れない踏込み消毒槽用凍結防止ヒーター
（独）家畜改良センター

公益社団法人 中央畜産会

〒101-0021 東京都千代田区外神田2丁目16番2号
第2デューアイシービル9階
TEL 03-6206-0846 FAX 03-5289-0890
URL <http://jlia.lin.gr.jp/cali/manage/>
E-mail jlia@jlia.jp

おらが故郷の経営自慢

肉用牛の発育・生理を考慮した施設整備・飼養管理技術が高収益性を実現
—幅広い情報収集・共有化と細やかな心配りで家族の夢を叶える—
株式会社 玉牧場（肉用牛繁殖経営・鹿児島県霧島市）

内倉 亘

平成28年度全国優良畜産経営管理技術発表会で最優秀賞（農林水産大臣賞）を受賞した株式会社玉牧場の経営を紹介します。

地域の概要

株式会社玉牧場（代表取締役：久留須茂さん）は、霧島市の旧横川町に位置し、鹿児島空港から約30分の中山間地域で、清く豊潤な天降川、流域に広がるのどかな田園、そして山麓から平野部までの温泉群等と、海、山、川、田園、温泉など多彩で豊かな自然に恵まれています。

霧島市の平成27年の農業産出額は217億



右から代表取締役の茂さん・美鈴さん夫婦、後継者で長男の賢茂さんと妻のめぐみさん、娘の華鈴ちゃん、ご両親

(表1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭(羽)数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和35年	園芸作 肉用牛繁殖	繁殖牛1頭		経営主・久留須茂氏の父三男氏が就農、園芸作に加え肉用牛繁殖牛を導入1頭(昭和34年家畜人工授精師免許取得)
昭和54年	肉用牛繁殖	繁殖牛10頭 種雄牛2頭	100 a	茂氏が県立畜産講習所を卒業(在学中に家畜人工授精師免許取得)し就農父三男氏が種雄牛管理者・家畜人工授精業務を担当
昭和62年	肉用牛繁殖	繁殖牛22頭 種雄牛2頭	200 a	茂氏結婚(28歳)
平成13年	肉用牛繁殖	繁殖牛58頭 種雄牛2頭	500 a	【千葉県でBSEが発生】 JAあいら肥育牛センター(元養豚センター)跡地を購入・移転
平成18年	肉用牛繁殖	繁殖牛121頭 種雄牛2頭	1000 a	株式会社玉牧場設立、久留須茂氏が代表取締役
平成20年	肉用牛繁殖	繁殖牛141頭 種雄牛2頭	1000 a	後継者賢茂氏(長男)が県立農業大学校を卒業し就農(20歳)
平成21~22年	肉用牛繁殖	繁殖牛135頭 種雄牛2頭	2000 a	畜産基盤再編総合整備事業等により以下を整備 ・子牛哺育舎、繁殖牛舎、堆肥舎建設 ・TMRミキサー、ホイルローダ、哺乳ロボット整備 ・飼料畑造成(1.43ha) ・トラクター、モア、ジャイロテッタ、ロールベアラー、ラッピングマシン、ロールグロープ、マニアスプレッタ整備
平成23年	肉用牛繁殖	繁殖牛131頭 種雄牛2頭	2000 a	【東日本大震災】
平成26年	肉用牛繁殖	繁殖牛170頭 種雄牛3頭	2500 a	後継者賢茂氏(長男)結婚(26歳)
平成27年	肉用牛繁殖	繁殖牛195頭 種雄牛3頭	3500 a	茂氏に初孫誕生(56歳) 飼料作付面積拡大理由:近隣の水稲農家と契約(耕畜連携)
平成28年(予定)	肉用牛繁殖	繁殖牛204頭 種雄牛3頭	4300 a	活動火山周辺地域防災営農対策事業によりWCS飼料生産組合で ・細断型ホルクropp収穫機、ラッピングマシン、トラクター、フロントローダー、トレーラー整備

(表2) 経営実績

経営の概要	労働力員数	家族・構成員	3.0人	
	(畜産・2000hr換算)	雇用・従業員	0.2人	
	成雌牛平均飼養頭数		186.1頭	
	飼料生産実面積		2,700 a	
	年間子牛分娩頭数		175頭	
	年間子牛販売頭数	雌子牛(肥育素牛生体販売)	81頭	
		雄子牛(肥育素牛生体販売)	75頭	
	所得率		42.3%	
	成雌牛1頭当たり生産費用		391,326円	
		うち購入飼料費	179,699円	
生産性	成雌牛1頭当たり年間子牛分娩頭数		0.94頭	
	成雌牛1頭当たり年間子牛販売頭数		0.84頭	
	平均分娩間隔(延152頭分)		12.1ヵ月	
	雌子牛	販売日齢		260日
		販売体重		278kg
		日齢体重		1.069 kg
		1頭当たり販売価格		608,400円
	雄子牛	販売日齢		249日
		販売体重		303kg
		日齢体重		1.217 kg
1頭当たり販売価格			731,924円	
粗飼料	成雌牛1頭当たり飼料生産延べ面積		18.8 a	
	借入地依存率		85%	
	飼料TDN自給率		55.6%	

3500万円で、うち畜産が145億2400万円で67%を占める畜産業の盛んな地域です。畜種別には、肉用牛40億1100万円、酪農7億6900万円、養豚13億700万円、養鶏(採卵鶏、種鶏、ブロイラー)84億3500万円となっています。

平成27年2月の肉用牛飼養農家は527戸で、1万3070頭を飼養しており、その中で繁殖農家は514戸で、繁殖牛7013頭を飼養しています。

経営・技術の特色等



【経営収支に表れた高い飼養技術】

平成27年度の差引生産原価は成雌牛1頭当たり30万1000円(平成26年県畜産協会経営診断平均値37万7000円、県農業経営管理指導指標32万7000円)、販売子牛1頭当たり35万9000円

(同46万8000円、36万4000円)となっており、低コスト生産経営を実践しています。

このように、低コスト生産を実践している背景には、分娩間隔の短縮を図り、高い子牛生産率、低い事故率から高い子牛出荷率を維持していることが大きくなっています。

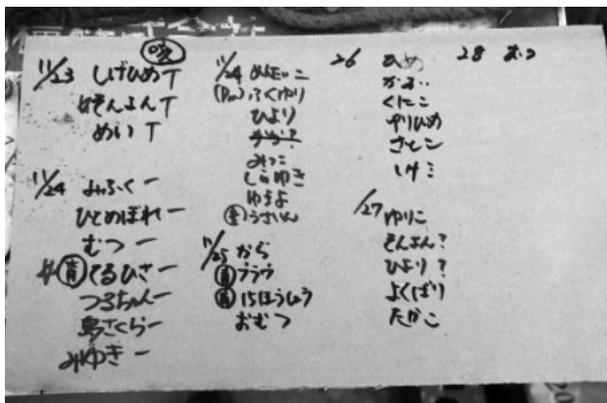
また、飼養規模の拡大は、高い飼養管理技術の維持を前提に徐々に行ってきましたが、血統が良く高額な初妊牛ばかりではなく、比較的高齢な経産牛の導入も積極的に行い、繁殖牛の増頭を一番に進めてきた家族の先見性が、子牛市場の価格動向と合致した結果であるといえます。

【家族間での情報共有】

(1) 最低「1日2回」は家族ミーティング

毎日必ず10時と15時に全員で休憩する時間を設けており、牛の健康状態や作業内容などの確認・情報交換をしています。

「農場を回る時は手ぶらで帰らない」「牛舎にはいつもたくさんのお金が落ちている」がモットーで、牛のどんな小さな変化も見逃さず、発情や病気の早期発見・早期治療等に努



牛房入り口に段ボール製のボードを設置しデータを書き込む

めています。

(2) 家族間での飼養管理情報確認・交換

情報は、各牛房前の掲示板やガムテープ、メモ用紙を活用して、咳や下痢、排尿を確認したら、その場ですぐに記録しています。また、新繁殖牛舎では20頭ずつの群管理をしていることから、誰でも分かるようにビニールテープで頬綱や耳標に色分けをしており、1回授精した牛には青色、2回目は黄色、3回以上は赤色、受胎を確認した牛は緑色、テープなしは未授精牛というように繁殖状況の「見える化」を実現しています。

なお、パソコンの繁殖管理システムを併用することも情報の共有化につながり、優れた繁殖成績を実現しています。

【子牛の飼養管理の徹底と発育段階に応じた群管理】

母牛を分娩予定2週間前に、繁殖牛舎から約4km離れた自宅近くにある分娩牛舎にトラックで移動させ、分娩後は10日目に母牛と子牛を一緒にトラックで農場に移動しています。母牛は削蹄とビタミン剤の投与を行い繁殖牛舎に移動させます。

子牛は哺育牛舎へ移動して、最低45日齢までの5週間を人手で哺乳(朝・夕)を行っています。哺育牛舎は、旧JA時代のベビー豚舎をそのまま利用しており、40室ある旧豚房それぞれに子牛1頭を入れています。

また、中央部分のふん尿処理用スクレーパーもそのまま活用しています。なお、子牛が哺育牛舎に入る前日までに、給餌バケツ・給水バケツや敷料等の準備を完了させます。



旧養豚センター時代の豚舎を活用した哺育牛舎



WCSをTMRミキサーに入れ給餌する

また、個体別の衛生管理プログラムを各室の前に表示しています。

以前は2～3日齢での超早期親子分離を行っていましたが、発育や事故防止の観点から現在の方法に変更しました。また、哺乳ロボットの導入事例を十分検討し、45日齢以降での利用としています。

45日齢以降、子牛は移動に伴うストレスを緩和するために4頭1組で群編成して哺乳ロボット牛舎へ移動し90日齢まで飼育します。ここでは代用乳を長めに給与することにより、コストは上昇しますが、発育・増体がよくなり、3～4ヵ月齢時点で1日5～6kgの飼料（粗飼料・濃厚飼料）を採食するようになります。

人工乳離乳後は、やはり移動のストレス軽減を考慮して8頭1組で群編成し、隣の育成牛舎で1ヵ月間管理します。哺育牛舎から育成牛舎については粗飼料と配合飼料の不断給餌を行っていますが、特に良質粗飼料（掛干稲ワラ、チモシー）を給与するようにし、裁

断も短めにして採食量が増加するよう工夫しています。

その後、子牛舎へ雌と雄を分離して、原則、月齢順に3頭1組で移動し、子牛市場への出荷まで飼育します。子牛舎では毎月の子牛せり市出荷後に順送りで牛房を移動しています。

哺育牛舎、育成牛舎および子牛舎では尿石症の予防のために給水器をセンサー式とし、冬季は温水を給与しています。

子牛市場への出荷は、平成25年前後は240日齢程度としていましたが、購買者からの要望を受けて、現在は少し遅らせて250～260日齢での出荷を心がけており、飼料費削減や密飼い飼育によるストレスの軽減、さらには肥育農家が求める余分な脂肪のつかない健康な子牛生産につながって、固定客も増加しています。なお、出荷日齢が早いにも関わらず、出荷体重は出荷先である始良中央家畜市場の平均（263日齢、279kg、日齢体重1061g雌雄平均）を上回っています。

【飼料基盤等】

昭和54年就農当時の飼料作付面積は1haでしたが、飼養規模の拡大に合わせて、借地等により順次面積を拡大して、平成18年の法人化時には10haとなりました。平成22年には、畜産基盤再編整備事業による飼料畑造成(1.43ha)もあり、延べ20haの作付となりました。

なお、平成21～22年度にかけて降灰対策事業および畜産基盤再編整備事業により、トラクター、モア、ジャイロテッダ、ロールベアラ、ラッピングマシン、マニアスプレッダおよびTMRミキサー、ホイルローダー等の機械を導入して、作業の効率化を図っています。

その後、さらに頭数規模拡大に伴い、近隣水稻農家の水田裏作拡大や、飼料イネ契約栽培によるWCSの生産拡大にも取り組み、平成27年度は延べ35haで生産を行っており、粗飼料の自給率は、TDN換算で92.3%（繁殖牛は100%自給）となっています。

平成28年度においては大住WCS飼料生産組合を立ち上げ降灰対策事業を活用し、細断型ホールクロープ収穫機などの機械を導入することで、より効率的なWCS生産・面積拡大に取り組むこととしています。

耕畜連携の活動

玉牧場では平成16年から飼料イネWCSの生産・利用に取り組んでおり、徐々に面積を拡大してきました。平成27年には近隣の水稻農家と契約して4haの水田で飼料イネを生産し、WCSとして利用しています。作付けから

肥培管理を水稻農家が行い、収穫を玉牧場が行っています。また、水田裏作として自己所有1haおよび借地14haでイタリアンライグラスと麦の飼料作を行っています。

なお、畑での飼料作は延べ16ha（夏作：ヘイスーダン、ヒエ、冬作：イタリアン）ですが、うち2.4haは園芸農家の裏作であり、園芸農家には無償で堆肥を譲渡しています。さらに、近隣の水稻農家から約16ha分の稲わらを購入しています。

堆肥については、上記園芸農家への無償譲渡が約1割で、他は全て玉牧場の粗飼料生産のために利用して、環境に配慮した農業を実践しています。

近隣農家からの要望が多いことと、細断型ホールクロープ収穫機の導入により収穫作業が容易になったことから、平成28年度は飼料イネWCSの契約生産を3倍の12haに拡大しています。

地域に対する貢献

① 地域肉用牛農家のリーダーとして

経営主の久留須茂さんは地域内肉用牛繁殖農家（約50戸）の家畜人工授精業務（年間約500頭）も行っており、農家訪問時に受胎率向上、適正交配、子牛育成指導等を行い、厚い信頼を得ています。現在、始良地区家畜人工授精師会（35名）の理事および横川町和牛振興会（65名）の副会長として、研修会、交流会等を実施するなど、地域肉用牛農家のリーダーとして活躍しながら自己の経営改善に取り組み、その姿勢は肉用牛農家の模範と



新繁殖牛舎

なっています。

② 女性の活躍

久留須さんの妻である美鈴さんは、平成15年に女性農業経営士として認定を受けています。また、平成18年に結成された鹿児島県の畜産女性のネットワーク「畜産ネットさつまおごじょ」の設立時からのメンバーで、平成23年から26年まで会長を務めました。このネットワークは現在会員が25名（肉用牛経営20名、酪農経営3名、養豚経営2名）で、女性の視点で研修会の開催や消費者との交流、後継者との意見交換会などを活発に行っています。特に近年では、一般消費者に広く畜産業を知ってもらうことを目的にバター作り等のイベントを行うなど畜産の安心・安全を幅広く伝える活動も実施しています。

なお、平成24から25年には、県政全般について女性の視点から政策提言を行う「かごつまおごじょ委員会」の委員として、農業・食料分科会の中で、食を大切にする文化を育て、食や農業・農村を健全な形で次世代へ継承し、食文化・農村文化の国際交流を展開する

ことについて活発な議論を行い、知事への提言書を提出しています。

③ 食育

地域畜産ふれあい体験事業に参加して、子どもたちの見学を受け入れるなど、食育等にも積極的に取り組んでいます。

④ 研修の受け入れ

機械メーカーの新人職員・新任教職員・農林水産省の職員の宿泊研修先として、受け入れをしており幅広い分野との情報交換や教育等にも積極的に取り組んでいます。

⑤ 人材育成

地域の若い人材を教育し、有能な若者を育てたいという思いから、平成27年9月から従業員を雇用（常雇1名）しています。今後、将来の肉用牛経営者としての独立を視野に入れて指導を行っています。

将来の方向



当面は現状の規模を維持し、家族・従業員一体となって、さらなる飼養管理技術の向上による所得の増加を図りたいと考えています。

次男が平成27年に大学を卒業し、獣医師として県内の動物病院に就職したので、将来的には法人内に入ってもらい、繁殖部門だけでなく肥育部門にも取り組んで一貫経営を目指したいとのこと。また、候補種雄牛の産肉能力を評価するための現場後代検定を実施して、優良種雄牛を選抜することにより鹿児島県肉用牛の改良増殖に貢献したいと考えています。

（筆者：（公社）鹿児島県畜産協会事業部事業一課調査役）

行政の窓

「平成27年度牛乳・肉用牛・肥育豚 生産費」を公表

農林水産省大臣官房統計部

農林水産省大臣官房統計部は12月9日、平成27年度牛乳生産費、肉用牛生産費、肥育豚生産費を公表しました。

牛乳生産費



平成27年度の搾乳牛1頭当たり全算入生産費（全国）は73万6480円で、前年度に比べ3.8%減少した。これは費用合計から差し引かれる副産物価格（子牛価格）が増加したこ

と、また飼料価格の低下により飼料費が減少したこと等による（表1）。

生乳100kg当たり（乳脂肪分3.5%換算乳量）全算入生産費は7812円で、前年度に比べ5.8%減少した。

1経営体当たりの搾乳牛飼養頭数は53.2頭で、前年度に比べ3.5%増加した。1頭当たり投下労働時間は104.40時間で前年度並みであった。

(表1) 牛乳の生産費（全国）

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実 数	構成割合	
搾乳牛1頭当たり				%	%
物 財 費	円	653,430	651,784	80.1	△ 0.3
飼 料 費	//	394,800	389,653	47.9	△ 1.3
乳 牛 償 却 費	//	104,274	105,820	13.0	1.5
農 機 具 費	//	26,504	28,362	3.5	7.0
獣医師料及び医薬品費	//	25,805	27,251	3.3	5.6
労 働 費	//	161,464	161,703	19.9	0.1
費 用 合 計	//	814,894	813,487	100.0	△ 0.2
副 産 物 価 額	//	88,306	116,654	—	32.1
生産費(副産物価額差引)	//	726,588	696,833	—	△ 4.1
支払利子・地代算入生産費	//	736,195	706,265	—	△ 4.1
全 算 入 生 産 費	//	765,924	736,480	—	△ 3.8
生乳100kg当たり(乳脂肪分3.5%換算乳量) 全 算 入 生 産 費	円	8,290	7,812	—	△ 5.8
1経営体当たり搾乳牛飼養頭数	頭	51.4	53.2	—	3.5
1頭当たり投下労働時間	時間	104.94	104.40	—	△ 0.5

また、搾乳牛1頭当たり実搾乳量は8470kgで、前年度に比べ1.6%増加した。

肉用牛生産費



平成27年度の肉用牛生産費については、次のとおりです。

① 子牛1頭当たり全算入生産費は59万340円で、前年度に比べ0.9%減少した。繁殖雌牛（廃用）価格の上昇に伴う処分差益の増加により、繁殖雌牛減価償却費が減少したこと等による（表2）。

1経営体当たり子牛販売頭数は11.1頭で、前年度に比べ5.7%増加した。1頭当たり投下労働時間は123.08時間で、前年度に比べ1.0%減少した。

② 去勢若齢肥育牛1頭当たり全算入生産費は107万751円で、前年度に比べ8.0%増加した。素牛の価格増加により素畜費が増加したこと等による（表3）。

1経営体当たり販売頭数は39.4頭で、前年度に比べ5.7%減少した。1頭当たり投下労働時間は51.69時間で前年度に比べ6.1%増加した。

③ 乳用雄育成牛1頭当たり全算入生産費は16万6920円で、前年度に比べ6.1%増加した。素牛の価格上昇により素畜費が増加したこと等による（表4）。

1経営体当たり販売頭数は298.8頭で、前年度に比べ17.3%減少した。1頭当たり投下労働時間は6.73時間で前年度に比べ3.5%増加した。

④ 乳用雄肥育牛1頭当たり全算入生産費は46万7265円で、前年度に比べ1.7%増加した。素牛の価格上昇により素畜費が増加したこと等による（表5）。

1経営体当たり販売頭数は125.4頭で、前年度に比べ9.4%減少した。1頭当たり投下労働時間は16.49時間で前年度に比べ

（表2）子牛生産費

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実 数	構成割合	
子牛1頭当たり				%	%
物 財 費	円	381,831	377,010	68.6	△1.3
うち飼 料 費	//	213,612	215,489	39.2	0.9
繁殖雌牛償却費	//	57,560	43,059	7.8	△25.2
獣医師料及び医薬品費	//	20,481	22,447	4.1	9.6
種 付 料	//	20,229	21,879	4.0	8.2
労 働 費	//	170,272	172,642	31.4	1.4
費用合計	//	552,103	549,652	100.0	△0.4
生産費（副産物価額差引）	//	526,152	523,074	—	△0.6
支払利子・地代算入生産費	//	535,084	533,249	—	△0.3
資本利子・地代全額算入生産費	//	595,679	590,340	—	△0.9
1経営体当たり子牛販売頭数	頭	10.5	11.1	—	5.7
1頭当たり投下労働時間	時間	124.32	123.08	—	△1.0

(表3) 去勢若齢肥育牛生産費

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実 数	構成割合	
肥育牛1頭当たり				%	%
物 財 費	円	907,454	982,100	92.7	8.2
うちも と 畜 費	//	507,188	585,251	55.3	15.4
飼 料 費	//	328,177	324,077	30.6	△1.2
建 物 費	//	12,661	12,819	1.2	1.2
敷 料 費	//	12,336	12,462	1.2	1.0
労 働 費	//	70,891	76,862	7.3	8.4
費 用 合 計	//	978,345	1,058,962	100.0	8.2
生産費(副産物価額差引)	//	968,264	1,048,101	—	8.2
支払利子・地代算入生産費	//	982,054	1,060,780	—	8.0
資本利子・地代全額算入生産費	//	991,539	1,070,751	—	8.0
1 経営体当たり販売頭数	頭	41.8	39.4	—	△5.7
1 頭当たり投下労働時間	時間	48.72	51.69	—	6.1

(表4) 乳用雄育成牛生産費

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実 数	構成割合	
育成牛1頭当たり				%	%
物 財 費	円	146,178	155,561	93.7	6.4
うち飼 料 費	//	74,606	72,593	43.7	△2.7
も と 畜 費	//	50,622	58,911	35.5	16.4
獣医師料及び医薬品費	//	5,804	6,571	4.0	13.2
敷 料 費	//	5,974	6,337	3.8	6.1
労 働 費	//	9,881	10,499	6.3	6.3
費 用 合 計	//	156,059	166,060	100.0	6.4
生産費(副産物価額差引)	//	154,321	163,775	—	6.1
支払利子・地代算入生産費	//	155,369	164,723	—	6.0
資本利子・地代全額算入生産費	//	157,362	166,920	—	6.1
1 経営体当たり販売頭数	頭	361.3	298.8	—	△17.3
1 頭当たり投下労働時間	時間	6.50	6.73	—	3.5

1.4%増加した。

- ⑤ 交雑種育成牛1頭当たり全算入生産費は29万1994円で、前年度に比べ2.5%増加した。素牛の価格増加により素畜費が増加したこと等による(表6)。

1 経営体当たり販売頭数は181.2頭で、前年度に比べ4.4%増加した。1 頭当たり投下労働時間は10.31時間で前年度に比べ3.8%減少した。

- ⑥ 交雑種肥育牛1頭当たり全算入生産費は

(表5) 乳用雄肥育牛生産費

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実 数	構成割合	
肥育牛1頭当たり				%	%
物 財 費	円	432,419	439,522	94.6	1.6
うち飼 料 費	//	262,270	252,108	54.3	△ 3.9
も と 畜 費	//	134,039	150,371	32.4	12.2
敷 料 費	//	8,305	9,093	2.0	9.5
光熱水料及び動力費	//	7,713	7,622	1.6	△ 1.2
労 働 費	//	24,380	25,030	5.4	2.7
費 用 合 計	//	456,799	464,552	100.0	1.7
生産費(副産物価額差引)	//	451,601	459,816	—	1.8
支払利子・地代算入生産費	//	454,479	462,390	—	1.7
資本金子・地代全額算入生産費	//	459,586	467,265	—	1.7
1 経営体当たり販売頭数	頭	138.4	125.4	—	△ 9.4
1 頭当たり投下労働時間	時間	16.26	16.49	—	1.4

(表6) 交雑種育成牛生産費

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実 数	構成割合	
育成牛1頭当たり				%	%
物 財 費	円	266,340	274,350	94.9	3.0
うちも と 畜 費	//	165,626	175,626	60.8	6.0
飼 料 費	//	79,279	78,135	27.0	△ 1.4
敷 料 費	//	5,553	6,336	2.2	14.1
獣医師料及び医薬品費	//	5,785	4,756	1.6	△17.8
労 働 費	//	15,722	14,609	5.1	△ 7.1
費 用 合 計	//	282,062	288,959	100.0	2.4
生産費(副産物価額差引)	//	279,974	287,216	—	2.6
支払利子・地代算入生産費	//	281,307	288,054	—	2.4
資本金子・地代全額算入生産費	//	284,980	291,994	—	2.5
1 経営体当たり販売頭数	頭	173.6	181.2	—	4.4
1 頭当たり投下労働時間	時間	10.72	10.31	—	△ 3.8

75万2089円で、前年度に比べ5.9%増加した。素牛の価格上昇等による(表7)。

1経営体当たり販売頭数は80.5頭で、前年度に比べ4.1%増加した。1頭当たり投下労働時間は25.79時間で前年度に比べ

5.6%減少した。

肥育豚生産費



平成27年度の肥育豚1頭当たり全算入生産費は3万3828円で、前年度に比べ2.6%減少

(表7) 交雑種肥育牛生産費

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実数	構成割合	
肥育牛1頭当たり				%	%
物 財 費	円	659,100	703,108	94.7	6.7
うちも と 畜 費	//	271,169	326,594	44.0	20.4
飼 料 費	//	339,623	326,384	44.0	△ 3.9
建 物 費	//	9,261	9,783	1.3	5.6
光熱水料及び動力費	//	10,140	9,476	1.3	△ 6.5
労 働 費	//	41,570	39,329	5.3	△ 5.4
費 用 合 計	//	700,670	742,437	100.0	6.0
生産費(副産物価額差引)	//	694,481	736,147	—	6.0
支払利子・地代算入生産費	//	700,210	741,818	—	5.9
資本金子・地代全額算入生産費	//	710,027	752,089	—	5.9
1 経営体当たり販売頭数	頭	77.3	80.5	—	4.1
1 頭当たり投下労働時間	時間	27.32	25.79	—	△ 5.6

(表8) 肥育豚の生産費

区 分	単位	平成26年度	27		対前年度 増減率
			実数	構成割合	
肥育豚1頭当たり				%	%
物 財 費	円	30,659	29,833	88.0	△ 2.7
うち飼 料 費	//	23,100	22,177	65.4	△ 4.0
獣医師料及び医薬品費	//	2,042	2,125	6.3	4.1
光熱水料及び動力費	//	1,600	1,526	4.5	△ 4.6
建 物 費	//	1,391	1,339	4.0	△ 3.7
労 働 費	//	4,115	4,062	12.0	△ 1.3
費 用 合 計	//	34,774	33,895	100.0	△ 2.5
生産費(副産物価額差引)	//	33,908	33,064	—	△ 2.5
支払利子・地代算入生産費	//	34,036	33,197	—	△ 2.5
全 算 入 生 産 費	//	34,728	33,828	—	△ 2.6
生体100kg当たり全算入生産費	円	30,455	29,882	—	△ 1.9
1 経営体当たり販売頭数	頭	1,511.5	1,530.8	—	1.3
1 頭当たり投下労働時間	時間	2.71	2.64	—	△ 2.6

した。飼料価格の低下により、飼料費が減少した。飼料価格の低下により、飼料費が減少したこと等による(表8)。

生体100kg当たり全算入生産費は2万9882円で、前年度の比べ1.9%減少した。

1経営体当たり販売頭数は1530.8頭で、前年度に比べ1.3%増加した。1頭当たり投下労働時間は2.64時間で前年度に比べ2.6%減少した。

セミナー

経営技術

平成27年度における畜産特別資金等借入者の計画達成に係る実績点検結果の概要について②(養豚経営)

ア 計画達成にかかる進捗状況

① 報告があった農家数73戸（経営形態別：繁殖2戸、一貫66戸、肥育5戸）の1戸当たりの実績は、飼養頭数は918.2頭（計画対比99.0%）で、畜産部門収入は117,657千円（同101.6%）、畜産部門支出は104,731千円（同94.7%）、家計費は3,563千円（同109.8%）となり、償還財源は10,607千円（同121.4%）と計画を達成している。

② 償還財源の進捗率は、90%未満の農家が29戸（39.7%）、90～100%未満が3戸（4.1%）、100%～110%未満が13戸（17.8%）、110%以上が28戸（38.4%）となっている。

イ 計画に対して進んでいない要因等

- ・分娩舎および離乳後の事故の発生により出荷頭数が減少
- ・疾病の発症により子豚の死亡・発育低下〔豚流行性下痢、浮腫病、サルモネラ症、PRRS（呼吸障害症候群）〕

- ・自家育成豚による母豚の更新が計画通り進まず母豚飼養頭数が減少
- ・資金の余裕なく、定期的な母豚の入替えができず繁殖成績が低下
- ・施設の老朽化が進み生産性低下

ウ 地域で実施した指導と今後の対応

① 経営・資金管理等の指導

- ・定期的（月1回）に経営主を交えた経営改善会議を開催して、問題点と改善対策などを検討
- ・上物率向上へ向けた出荷データの共有化
- ・経営収支の把握・改善するために毎月の簿記記帳を継続実施
- ・毎月の実績数値を借受者に提出依頼して、目標利益達成に向けた意識づけ
- ・経営実績の進捗状況を把握すると共に資金繰りに関する検討を実施
- ・飼料代金の定期的な支払に向けた督促と、販売代金からの償還財源の確保

② 飼養技術・管理等の指導

(表3) 養豚経営の資金別計画達成の進捗状況（1戸当たり）

(単位：千円、%)

資金名	集計戸数	飼養頭数		畜産部門収入		畜産部門支出		家計費		償還財源	
		(平均)	計画対比	(平均)	計画対比	(平均)	計画対比	(平均)	計画対比	(平均)	計画対比
畜産特別資金	17	1,202.6	94.4	88,104	79.7	77,308	76.9	4,277	112.9	8,917	111.0
緊急支援資金	56	831.8	101.1	126,629	107.9	113,055	99.5	3,343	108.7	11,120	124.3
計	73	918.2	99.0	117,657	101.6	104,731	94.7	3,563	109.8	10,607	121.4

- ・技術力の向上のため、養豚部会等を中心に生産者同士の情報交換
 - ・夏季の受胎率向上を目的とした育成豚の導入の実施（6～8月種付け用）
 - ・適正重量での出荷のため出荷時の計量の実施
 - ・繁殖成績の向上のため、関係機関とJAが連携して妊娠鑑定、廃用豚の選抜補助等の定期巡回指導
 - ・妊娠鑑定機を活用した不受胎の早期発見による回転率の向上
 - ・受胎率、離乳頭数の改善のため、母豚更新を計画的に実施
 - ・育成率、事故率を改善するため適切なワクチネーションの実施、日ごろの離乳豚・肥育豚の観察を強化
 - ・離乳舎の飼育スペースを確保するためハウス豚舎の設置
 - ・養豚経営診断の結果に基づき、適正な飼育頭数による密飼い防止
- ③ 疾病、事故低減対策等の指導
- ・疾病の発生・防止対策として、洗浄・消毒・乾燥とワクチン接種による衛生管理を徹底〔PED（豚流行性下痢）等〕
 - ・夏場の暑熱対策として、低コストでできる石灰乳散布による飼養改善
 - ・子豚舎の空舎期間の確保、分娩舎の間風対策と消毒の徹底
 - ・疾病のまん延防止対策として、コンテナハウスや古い豚舎の改修利用
 - ・家畜保健所の指導による繁殖豚舎での哺乳豚の事故および育成率の改善対策
- ・疾病豚の早期発見、早めの適切な処置と豚舎内の消毒等衛生管理の徹底
- Ⅱ 県協議会の指導・支援事項
- ① 経営・資金管理等の指導
- ・県協議会において、計画書の内容検討および借受者に対するヒアリングを実施
 - ・新規投資は、原則として審査会の合議事項となることを周知
 - ・家畜異動状況（成畜及び育成畜、子畜の生産・導入・販売・死亡廃用等）記録記帳の徹底および定期的な報告
 - ・償還財源確保に向けた積立ての実施
- ② 飼養技術・管理等の指導
- ・子豚の生産性の向上を図るため、受胎率の悪い雌豚の淘汰及び計画的な更新
 - ・自家産子豚の確保により、子豚導入に頼らない経営を目指すよう指導
 - ・母豚個体管理台帳による毎月の子取り用雌豚頭数および分娩・離乳頭数の記帳・管理
- ③ 疾病、事故低減対策等の指導
- ・特定疾病〔AD、PRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）〕を保因しない種豚の導入の推進
 - ・農場の防疫機能強化のため、車両ゲートおよび人体消毒用ボックスの設置
 - ・暑熱・防寒対策、給餌・給水方法およびそれら設備の点検
 - ・ワクチンの適正使用による疾病対策の強化
 - ・家畜保健衛生所による飼養衛生管理基準の遵守を指導

農林水産省から

薬剤耐性（AMR）対策の推進について

～ 抗菌剤の慎重使用等対策を進め、消費者の信頼に応えましょう！～

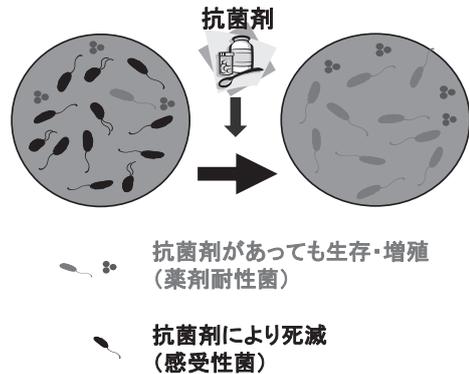
農林水産省 消費・安全局 畜水産安全管理課

薬剤耐性菌とは？

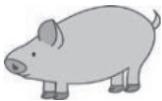
薬剤耐性菌とは、「抗菌剤が効かない細菌」です。薬剤耐性菌は、抗菌剤の使い過ぎなどにより増加し、人や動物の治療が困難になります。

世界的に、薬剤耐性菌による感染症が増加しており、大きな問題となっています。

そのため、平成27年5月にWHOが国際行動計画を採択し、我が国でも、平成28年4月、今後5年間に取り組むべき対策をまとめた行動計画（アクションプラン）が決定されました。



薬剤耐性問題と畜産との関わりは？



抗菌剤は、畜産分野でも、動物用医薬品や飼料添加物として使用されています。

家畜への抗菌剤の使用により増加した薬剤耐性菌が、家畜の治療を困難にするだけでなく、畜産物等を介して、人の感染症の治療を困難にすることが懸念されています。

そのため、アクションプランでは、人の医療分野とともに、畜産分野において必要な取組が記載されています。

畜産関係者が実施すべき対策は？

生産者や獣医師をはじめとする畜産関係者には、薬剤耐性問題を理解し、「抗菌剤の慎重使用」を徹底すること等が求められています。具体的には、

- ① 飼養衛生管理の徹底やワクチンの使用により感染症を減らすことにより、抗菌剤の使用機会を減らすこと
- ② 抗菌剤の使用を真に必要な場合に限定すること

が対策の基本となります。



国産畜産物に対する消費者からの信頼に応えるため、また、家畜に対する抗菌剤の有効性を維持するためには、畜産関係者が一体となって対策に取り組む必要があります。

皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。



詳細は、農林水産省HPに掲載しています。

農林水産省 抗菌性物質

検索

<http://www.maff.go.jp/j/syouan/tikusui/yakuzi/koukinzai.html>



(独)農畜産業振興機構からのお知らせ**肉用牛肥育経営安定特別対策事業(新マルキン事業)
の補填金単価(概算払)について****[平成28年11月分]**

平成28年11月に販売された交付対象の契約肥育牛に適用する肉用牛肥育経営安定特別対策事業実施要綱附則9の概算払の補填金単価について、表1および表2の通り公表しました。

また、平成28年11月に販売された生産者積立金の納付が免除された交付対象の契約肥育牛に適用する補填金単価については、表3の通り公表しました。

なお、補填金単価の確定値については、平成29年2月上旬に公表する予定です。

(表1) 補填金単価の算定(全国)

単位:円/頭

区 分	肉専用種(地域算定県を除く)	交 雑 種	乳 用 種
粗収益 (A)	1,291,894	745,764	448,033
生産コスト (B)	1,063,672	753,554	512,419
差額 (C)=(A)-(B)	228,222	△ 7,790	△ 64,386
暫定補填金単価 (D)=(C)×0.8	—	6,200	51,500
補填金単価(概算払) (D)-4,000	—	2,200	47,500

注:平成26年4月分から、消費税抜きで算定しています。

100円未満切り捨て

(表2) 補填金単価の算定(地域算定県・肉専用種)※

単位:円/頭

岩手県(日本短角種)	広島県	福岡県	佐賀県	長崎県
—	—	—	—	—
熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県
—	—	—	—	—

※ 各県の算定結果です。

(表3) 補填金単価(概算払)(生産者積立金の納付が免除された交付対象の契約肥育牛)

単位:円/頭

肉専用種	交 雑 種	乳 用 種
—	1,600	35,600

注:補填金交付額に見合う財源が不足する場合等、上記補填金単価を減額することがあります。

あいであ & アイデア

誤って踏んでも壊れない踏込み消毒槽用凍結防止ヒーター

(独)家畜改良センター

1 背景・ねらい

寒冷地では、冬季における踏込み消毒槽の消毒薬が凍結してしまいます。このため、牧場によっては踏込み消毒薬が石灰に限定されており、防疫徹底が困難となっています。

最近では、市販の水槽用ヒーターを踏込み消毒槽に入れることによって加温し凍結防止を図り、冬季であっても液体の消毒薬を使用しているケースが見られます。しかし、水槽用ヒーターは、誤って踏んで破損する危険性が高く、かなり注意を必要とします。

そこで、破損防止のカバーを鉄管や銅管を加工して作製し、水槽用ヒーターに装着する工夫を考案しました。

2 内容・特徴・効果

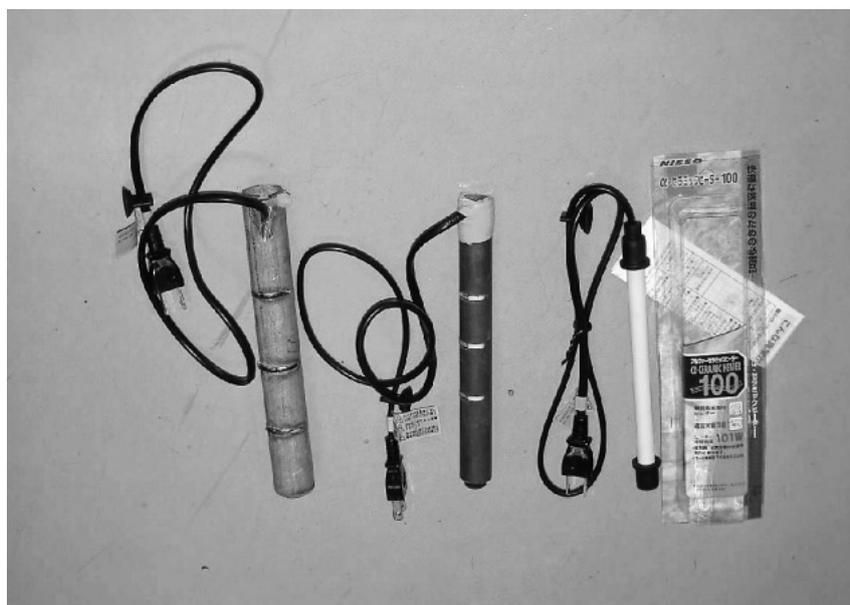
使用する水槽用ヒーターは、ペットショップや量販店で1500円前後で売られている棒状の普及品で十分です。

作成方法は、次のとおりです。

- ① まず、購入した棒状の水槽用ヒーターの太さに応じて、適当な口径の鉄管又は銅管を準備します。
- ② 準備した鉄管又は銅管は、ヒーターの長さよりも若干長めに切断します。
- ③ 鉄管又は銅管に数ヵ所切込みを入れます。
- ④ 鉄管又は銅管の中に水槽用ヒーターを挿入し、抜けないようにビニルテープで端を固定します。

使用する際は、液体の消毒薬を入れた踏込み消毒槽にヒーターを沈め、電源につなぐだけです。

北海道では極端に寒い日の朝に表面が凍ることもありますが、使用には問題ありません。ただし、空焚きにならないように注意してください。



(写真1) 材料と完成品

右は市販の水槽用ヒーター
中央は銅管で作製したカバーを装着したヒーター
左は鉄管で作製したカバーを装着したヒーター



(写真2) 使用中のヒーター

誤って踏んでも壊れず、凍結が防止できる